

新刊紹介

イヴァン・コヴァチェヴィチ (2015) 『セルビア人類学史』 ベオグラード*

Kovačević, Ivan (2015) *Istorija srpske antropologije [A History of Serbian Anthropology]*, Београд.

中澤 拓哉 NAKAZAWA Takuya

東京大学大学院総合文化研究科

ベオグラード大学哲学部民族学・人類学科教授であり、本稿執筆時点で同学科長を務めるイヴァン・コヴァチェヴィチ (Ivan Kovačević, 1952-) は、セルビアの民族学・文化人類学の重鎮であり、『セルビア民族学史』2巻本¹をはじめとした多くの著書がある。同学科から出版された本書『セルビア人類学史』²はそのコヴァチェヴィチの最新刊であり、現代セルビアにおける文化人類学を知る上で必読の書といえよう。章立ては以下の通りである（本書に章番号はふられていないが、評者が便宜的に補った）。

第1章「民族学から人類学へ」（11-21頁）、第2章「セルビア人のあいだでの2度目のファン・ヘネプ——20世紀の最後の四半世紀におけるセルビアの民族学／人類学史のための附記」（22-32頁）、第3章「ドゥシャン・バンディチ——コンテクスト、業績、意義」（33-48頁）、第4章「民族についての学問と人間の人類学」（49-57頁）、第5章「近代主義と構造主義」（58-70頁）、第6章「新しい儀礼と新しいセルビアの人類学——相互構造化のプロセス」（71-90頁）、第7章「セルビアにおける人類学の雑誌（2000-2010）」（91-101頁）、第8章「21世紀の最初の10年におけるセルビアの人類学」（102-120頁）。これにまえがき・文献目録・初出一覧が加わる。

章立てを見ればわかるように——体系的な叙述を予想させる書名とは裏腹に——本書はこれまでコヴァチェヴィチが発表した論文を集めた論集に近いものであり、個々の章は独立したものとして読むことができる。その内容も、民族学者ドゥシャン・バンディチ (Dušan Bandić, 1938-2004) の業績と意義を概説する第3章から、セルビアの人類学に関する学術論文数の推移を表にして検討した第7章まで幅広い。

本書が描き出すのは、20世紀後半から21世紀初頭において、ドイツ語圏の *Volkskunde* から強く影響を受けていたセルビアの民族学 (etnologija) の枠組みが、英米の影響を強く受けた人類学 (antropologija) へと徐々に変容していく歴史である（筆者はそれを「人類学化 (antropologizacija)」と呼んでいる。本書18頁以下を参照されたい）。この大きな枠組みは第1章で与えられ、それ以

* Иван Ковачевић, *Историја српске антропологије*, Београд: Одељење за етнологију и антропологију Филозофског факултета Универзитета у Београду, 2015, 132 стр.

¹ Иван Ковачевић, *Историја српске етнологије*, I-II (Београд: Српски генеалогички центар, 2001)。

² 本書には「民族人類学の諸問題」叢書の第1巻という番号がふられており、将来的にはこの叢書からも同学科の研究結果が発信されていくものと思われる（『民族人類学の諸問題 (Etnoantropološki problemi)』は、1987年から刊行され現在は電子化もされている同学科の紀要の名である）。なお、同学科は文庫本サイズの叢書「民族学叢書 (Etnološka biblioteka)」も刊行している。

降の章で具体的な変容のプロセスが論じられる。たとえば第5章では、1960年代のレヴィ＝ストロースの翻訳を嚆矢として、1970年代以降に次々と英米の文化人類学の重要文献が翻訳紹介されて“伝統的な”セルビアの民族学に影響を与え、続く第6章では、従来農村部の“伝統的な”儀礼を対象として行われてきた民族学研究が都市部の“新しい”儀礼へと対象を拡大させていく過程が、それぞれ豊富な同時代文献を参照しながら述べられている。

本書はセルビアの文化人類学史としてすぐれているだけでなく、あるディシプリンがどのように受容されていったかという事例研究としても示唆的だと思われる。旧ユーゴスラヴィアの民族学・文化人類学史については既に一定の研究蓄積があるが、本書はその中でも最新の成果であり、この地域の現代史を研究する者にとっては意義深いものであろう。

(なかざわ たくや 東京大学大学院総合文化研究科)